

しかし、海域へ負荷される処理水の影響は轟川河口に限られ、SSの寄与濃度の程度も極めて小さいこと、処理水の濁りの影響が、アオサンゴ等注目される群落及び高被度域に及ぶことはないと考えられること、工事に伴う赤土等の堆積による影響の程度は極めて小さいと予測されることから、サンゴ類の生息環境の変化は小さく、分布状況の変化はないものと予測される。なお、平成10年度の白化以降、当該海域のサンゴ類は比較的回復傾向か横這い状態であり、再び白化により活性が低下しない限り、現状の濁り負荷では急激な影響はないものと推察される。

⑧海藻草類

海藻草類は、水中の栄養塩類を吸収して光合成を行うことにより生長するが、工事に伴い海域へ負荷される濁りが著しい場合、海水への光の透過率が低下するため、光合成活性が低下し、海藻草類の生長に影響を与えることが考えられる。

しかし、海域へ負荷される処理水の影響は轟川河口に限られ現状で海藻被度の低い範囲であること、また、SSの寄与濃度の程度も極めて小さく、現状での赤土等の堆積は轟川河口から亀岩寄りの深みの海藻草類のほとんどみられない場所に限られ、処理水の海域への負荷に伴う赤土等の堆積による影響の程度は極めて小さいと予測されていることから、海藻草類およびそれらで構成される藻場の分布状況の変化はないものと予測される。

⑨ウミガメ類

ウミガメの上陸・産卵行動には、砂浜域の環境変化が最も影響するが、海岸域の改変はないこと、ウミガメ上陸・産卵の主な時間帯である夜間に工事がなから、工事中における砂浜域の環境の変化はないと考えられる。また、海域へ負荷される処理水の影響は轟川河口に限られ、SSの寄与濃度の程度や赤土等の堆積も極めて小さいことから、ウミガメ上陸・産卵に利用される海浜部の変化はほとんどないと予測される。これらのことから、ウミガメ類の上陸・産卵行動の変化はないものと予測される。

⑩大型魚食性魚類および海棲哺乳類

大型魚食性魚類はサメ類、大型アジ類、ダツ類等の遊泳性のものからハタ科のような磯魚まで生態は多様である。海域へ負荷される処理水の影響は轟川河口に限られ、SSの寄与濃度の程度は極めて小さいことから、生息環境および遊泳経路が変化することはないと考えられ、大型魚食性魚類の出現状況の変化はないものと予測される。

なお、事業実施区域周辺海域では海棲哺乳類の生息は認められなかった。

(2)重要な種の分布、生息・生育の状況及び生息・生育環境の状況

「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー植物I（維管束植物）環境省編」（2000年（財）自然環境研究センター）において、ウミシヨウブ